

284

特 253

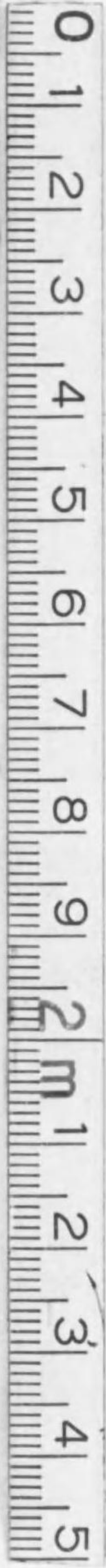
780

告第卅二輯(二七・三二・五)

残された濠洲と其周邊  
立上る印度の經濟羈絆

(以印刷代騰寫)

中山經濟研究所



始





429  
77

特253  
780

目次

- 一、濠洲と農牧生産……………(一)
- 二、未知數の鑛工業……………(七)
- 三、英本位の對濠貿易……………(二)
- 四、參戰と濠洲の立場……………(四)
- 五、新西蘭の産業……………(一六)
- 六、悲惨な印度農業……………(一八)
- 七、躍進的な印度工業……………(三)
- 八、周邊の産業と其他……………(三五)



## 一、濠洲と農牧生産

一七八八年二月七日ポートジャクソンの一角に英國旗が、七百五十名の囚人と、も  
に上陸したキャプテン・フィリップによつて掲げられ、イギリスの植民地なることが宣  
言されてから、百五十四年の歳月が流れる。その間濠洲は長足の進歩發展を遂げたと  
も云へるし、亦一面から見ればその發展過程は、極めて遅々たるものであつたとも云  
ひ得る。金鑛熱の波に乗つて鑛山の開發が盛んに行はれ、羊毛の生産額が世界第一位  
を占め、又カナダ、アルゼチンについて世界第三位を占る小麥輸出等から見れば濠  
洲の經濟的發展は目醒しいものありとも云へるが、一面産業開發資金を専ら英本國に  
依存し、白濠主義による低廉豊富なる他民族の勞力を徹底的に封鎖した濠洲の經濟が、  
農、牧を主とする原始産業資源國たる色彩の濃厚なことは、その經濟實相の貧弱性を



物語るものであるとも言へる。兎まれ七百七十萬平方キロの面積：印度、蘭印を合した面積よりも尙擴大な地域……に、人口僅に六百八十四萬八千餘人に過ぎぬことは、濠洲の發展が未だ搖籃時代にあることを示すものであらう。

千九百年各洲の人民投票による賛意と英本國議會の承認を得て聯邦を形成するに至つた濠洲は、政治的には殆ど獨立し得たのであつたが經濟的には英本國の隸屬を脱し得ず、亦聯邦形成前各洲に獨立した政府が存在してゐたため、鐵道のごとき各洲毎にそのゲージを異にするると云ふ有様で、運輸交通に統一を缺き、資源開發産業發展に重大なる支障を來たしてゐる。

英國は最初東印度會社類似の獨占會社を創設して濠洲開發に當つたが、一七九六年ニューキャッスルの石炭發見、ついで金鑛發見以來獨占會社による開發方針を放棄し、濠洲は農業及牧畜を基調とする經濟開發の過程を辿るに至つた。英聯邦投資に於て、

濠洲は印度、カナダを凌ぐ第一位を占め（研究報告第十七輯一六頁參照）一九三八年  
度調査に於て英の對濠投資は四億三千八百萬磅に達し、

政府公債四二七百萬磅、鐵道二百萬磅、公共事業七百萬磅、鑛山二〇百萬磅、雜四  
九百萬磅

となり、政府公債としての英本國の投資は他の自治領に比較し壓倒的な巨額を示してゐるが、羊毛小麥を主とする農牧産業への投資も相當巨額に上つて居る。濠洲第一の生産品たる羊毛は、九億九千萬封度約三百三十萬俵、價格にして四千二百萬磅で、世界羊毛生産量の四分の一に當る。而して羊の頭數は一九三八年度一億一千四百二十五萬頭、世界比率の約五分の一を占め、羊毛は生産額、綿羊頭數何れも世界第一位にある。過去五箇年の計數左の如くである。



	羊毛生産量 <small>千俵</small>	羊頭數 <small>千頭</small>
一九三三年度	三、〇四三	一〇九、九二一、
一九三三年度	三、一九九	一一三、〇四八、
一九三六年度	三、一二七	一〇八、八七六、
一九三七年度	三、二四六	一一〇、二四三、
一九三八年度	三、三三八	一一四、二五七、

次に小麥は一九三三年度耕地面積一千三百六十八萬エーカー、收穫高一億八千八百萬ブツセル、約四百萬噸であつて、收穫高から見ればソ聯、支那、米、印度、カナダ、アルゼンチン等に比してこそ劣るが、人口が六百八十餘萬人に過ぎず、濠洲自体の食糧としては百萬噸あれば充分で、之れに種子用三十五萬噸を差引いても他は、全部輸出し得るのであるから、小麥輸出量は極めて豊富で、一九三七—三三年度の輸出額が

約一億ブツセルに上つて居る。

	小麥産額 <small>千ブツセル</small>	耕地面積 <small>千エーカー</small>
一九三三年度	一七七、三三八、	一四、九〇一、
一九三三年度	一三三、三九三、	一二、五四四、
一九三六年度	一四四、二一八、	一一、九五七、
一九三七年度	一五一、三九〇、	一二、三一七、
一九三八年度	一八八、〇一八、	一三、六八八、

また小麥粉の産額は百四十五萬封度價格四百五十四萬磅である。尙濠洲には羊の他に牛の飼育も相當量に上るがその頭數は明瞭にされてゐない。肉類として屠殺される羊牛は年々莫大で、一九三七年羊の屠殺數千九百餘萬頭牛が三百八十萬頭で、人口稀薄なこゝて國內消費はその一部分で足り、他は悉く罐詰として英本國其他へ輸出さ



れる。貿易統計に示された肉類四八九、一六九千封度、その價格一一、七七七千磅、バター、チーズの産額も従つて多いことも當然である。

日本は從來主として濠洲の毛羊を輸入してゐた。日濠通商協定によつて大体年八十八萬俵程度を買付けてゐたのであつて、一時協定決裂の際南阿、南米産羊毛に轉じたことはあつたが、毛羊の性質から云つて亦地理的關係から見て、濠洲羊毛が主体をなすものであつた。小麥は滿洲小麥が自給自足するに至つて以來滿洲、關東洲、マレー方面へ輸出する小麥粉原料としての必要がなくなつてから、濠洲小麥の輸入は斷絶した。吾が國の羊毛使用量は支那事變前大体一箇年脂付二億五千封度であつたから、毎年一割増加と見て十年後の羊毛使用量は約五億封度、而して濠洲の現生産量は九億九千萬封度である。又五億封度の羊毛を羊の頭數に換算すれば約六千萬頭で、濠洲には現在一億一千四百萬頭をゆ超るのであるから、濠洲が共榮圈内に確保されれば、羊毛に關す

る限り心配はなく、小麥は滿洲國及華北の増産によつて、その需要は日滿支以外の、他の共榮圏域に振向けらるべきものであらう。

## 二、未知數の鑛工業

羊毛、小麥以外濠洲の主要生産品として鑛産物がある。金、鐵鑛石、磁鐵鑛、石炭等がそれで、一八五一年ニュー・サウスウエールズに金鑛發見以來の金鑛熱時代は去つたが、産額は不明なれど千五百萬濠磅（英磅一〇〇に對し濠磅は一二五の割合）が一九三九年度の金輸出額で、殆ど大部分英本國へ送られてゐる。鐵鑛石ではB・H・Pと云ふ半官半民の會社が經營、品位五〇%以上で、鐵埋藏量は相當豊富らしいが未だ調査が行はれてゐない。亞鉛、鉛も産出しこれは三井物産の手で従前日本に輸入されていた。主要鑛産物の生産價格を示せば、銀及亞鉛四、九四八千磅、銅七九七千磅、錫六



五九千磅、石炭六、九八七千磅となる。木材は鐵道杭木に好適のシャール・ウッド材が往年滿鐵で使用されたこともあつた。水産はクキンスランド洲の眞珠貝採取が邦人の努力によつて業績を擧てゐた以外には殆ど見るべきものはない。

羊毛、小麥等の原始産業に對し、濠洲に第二次産業と稱するものがある。それは機械機具、生活必需品等の製造工業に對する總稱である。一九三七年度の此の第二次産業に屬する工場數が二萬五千六百六十八工場、職工數五十二萬三千九百四十八人を算した。左の如くである。

産額(單位千濠洲磅)

- 機械、器具、運搬具 五二、七四四、
- 食品、飲料品、煙草 三六、二二五、
- 衣類 一四、六二五、
- 紙及文房具 一二、七九四、

- 藥品、染料、油等 一一、三一二、
- 纖維及纖維製品 九、八二八、
- 木製品、其他 八、三七四、
- 煉瓦、陶磁器、硝子 四、六八六、
- 非金屬鑛の處理及石材 四、一七九、
- 家具及寢台 三、八一五、
- 皮革 三、一一七、
- ゴム 二、三〇三、
- 貴金屬、寶石、器物 八五七、
- 樂器 一三七、
- 雜品 一、九一七、



熱、光、動力

一〇、七六三、

計

一七七、六八六、

即ち一九三七年度第二次産業全生産額は一億七千七百餘萬濠洲磅に達してゐるのである。クインスランド州で一度棉花栽培をした事があるが、ランカシャーの利益と對印度政策に抵觸する理由のもとに英本國より彈壓され、濠洲政府の意圖は天折せしめられた。地勢平坦にして起伏少き濠洲は、水力發電にも恵まれず、石炭はあれど生産費高く、重工業は固より輕工業も前記第二次産業以外殆ど見るべきものはなかつた。最近十箇年間の生産統計によると、原始産業による生産額が百分比率に於て六四%を占め、第二次産業たる製造工業による生産額は三六%、而して原始産業による生産額を更に分別すると、牧畜二三・五六%農産二〇・六五%、乳畜産一二%、鑛産五%、林魚産三%となり、濠洲は何んと云つても農牧を中心とする原始産業國と云はねばならぬ。

### 二、英本位の對濠貿易

次に濠洲の貿易狀況を一瞥するが、常に輸出が輸入を超ひ、貿易バランスは引續き

出超を示してゐる。(單位千英磅)

	輸出	輸入	出超
一九三四—三五年	九〇、三二五	七四、一一九	一六、一〇六
一九三五—三六年	一〇八、九〇七	八五、二五二	二三、六五五
一九三六—三七年	一二九、六六四	九二、六四〇	三七、〇二四
一九三七—三八年	一二五、八三八	一一三、九七五	一一、八六三
一九三八—三九年	一二二、二〇二	一〇二、一五六	一〇、〇四六

相手國貿易別について見れば、英本國が斷然群を抜き、貿易の大部分は英本國によつて占められてゐる。一九三八—三九年度に於ける輸出入の比率別を示せば左の如く



である。

	輸出 %	輸入 %
英本國	五四・四五	四一・六四
英自治領及屬領	一五・〇一	一七・九四
其他諸外國	三〇・五四	四〇・四二

なほ輸出入品目の主要なるものを挙げると、一九三七—三八年度輸出では、

(單位百萬磅)

羊毛(四六)、小麥(二〇)、バター(二〇)、肉(一一)、小麥粉(六)、乾果實(二)、生果實(二)、皮革(六)、精選鑛及粗鑛(二)、

となり一方輸入では (單位百萬英磅)

織物(一五)、機械類(一五)、金屬製品(一一)、運搬具(一〇)、油、脂肪及蠟(九)、紙及文房

具(六)、藥品及化學製品(四)、植物性食料(三)、植物質(纖維等)(三)、織糸及加工纖維(三)、タバコ(二)、

がその主要なるものである。濠洲羊毛、小麥の最大顧客は英本國で、バター、チーズ、肉類、乾果實の輸出先も大部分英本國及其の自治領で、亦輸入の織物、機械、金屬製品等の半額以上は英本國からで、次は米國、カナダ、蘭印、日本の順であつた。従前日本の對濠輸出主要品は綿織物、人絹織物、生糸、陶磁器、罐詰食料品、玩具、絹織物、硝子製品で輸出額昭和十一年六千八百萬圓、十二年七千二百萬圓、十三年六千九百萬圓、十四年七千二百萬圓。亦日本が濠洲からの輸入は羊毛、皮類、牛肉等で、昭和十一年一億八千萬圓、十二年一億六千五百萬圓、十三年八千二百萬圓、十四年七千一百萬圓となり、事變の影響から十五年度以降は輸出入とも激減した。



#### 四、參戰と濠洲の立場

濠洲は一九三九年九月第二次歐洲大戰に参加對獨宣戰布告をなすと同時に物資、資金、貿易、物價、交通等に對し戰時統制令を布き、就中物資統制では羊毛徵發制を設けて、濠洲及新西蘭の全産毛を戰爭繼續及終了後一箇年間強制買上げをなす事とし、小麥は小麥局を設置、濠洲の小麥を徵發全部英本國へ送ることを決定。亦肉類、牛酪、皮革、鐵鑛等の英本以外への輸、出を嚴禁、一方重工業の擴張を行ひ、シドニー、メルボルン、アデレード等の都市を中心に多數の軍需工場が建設され、資本金四千萬圓を投じてシドニーに設けられた造船所の如きも、濠洲としては最初の近代的造船設備である。従つて最近の濠洲は原始産業から一足飛びに、泥繩式ではあるが軍需産業國に轉換しつつある。此の軍需産業大擴張と歐洲戰線への派兵で、濠洲の軍需費は飛躍

的に増大、第二次歐洲大戰勃發の一九三八—三九年度から、一九四一—四二年度までの聯邦軍事費は三九六、五二〇千英磅に上り、人口稀薄な濠洲國民の一人當り、邦貨換算約八百五十圓と云ふ有様で、聯邦財政及國民生活への重壓となつてゐる。一方白濠主義の徹底は、軍事工業擴張に當面して極端な勞働力不定に陥らしめてゐる。産金熱の波に乗つて、一八五〇年頃夥く濠洲に入國した、支那人勞働に恐れをなした濠洲が、聯邦結成後所謂白濠主義による東洋民族の入國を嚴禁した爲に、勞銀は昂騰し、國內勞働者の生活水準は素破らしく向上したが、その結果現在の勞力難に苦悶する濠洲とはなつたのである。

尙濠洲には英本國以外の投資は殆どなく、米國が聯邦の公債に千六百萬英磅、各州公債に二千八百英磅の投資をしてゐる位のもので、邦人の企業も僅に日本鑛業がヤンピーサウンド鐵鑛に開發の手を着けたが、その後中絶の態で今日に至つてゐる。



邦人の濠洲移民は一八七六年(明治九年)に始まり、濠洲政府がノーサン・テリトリ  
ーに日本農民を招き、亦ク井ンスランド州の眞珠漁り及砂糖栽培業のため迎えたこと  
から、漸次増加して一九〇〇年(明治三十三年)頃には、在濠邦人は五千名を超えるに  
至つたのであつたが、爾來白濠主義によるアジア人排斥から、渡航者はなく、逆に歸  
還者が増加すると云ふ一路を辿つてゐたのであつた。

### 五、新西蘭の産業

新西蘭は面積二六七、八四四平方キロ、北島及南島に分れ、人口は百五十八萬人で、  
大洋を巡る暖寒流に恵まれて酷寒の冬なく、灼熱の夏もない。住民の九〇%以上英人  
で、先住のマオリ族はその數八萬に過ぎぬ。南洋民族中にこのマオリ族は最も日本人  
に似てゐるのみか、言語の組立並にその發音が日本語と多分に共通点を有してゐる。

新西蘭に英の植民が開始されたのは一八四〇年で、首都ウエリントンに新西蘭會社が  
設けられ、移民と産業開發に當つた。

産業は農牧を主とし、濠洲に次ぐ緬羊の産地で、現在の緬羊頭數約三千萬頭、羊毛  
生産額は一三八千噸、その輸出額は脂付一〇二千噸、洗滌毛二八千噸で、大部分英國  
へ供給される。新西蘭は貿易上の必要から冷凍肉の輸出を振興し始めてから、肉羊種  
の飼育が盛んとなり、従つて優良な羊肉生産を目的とする雜種羊が増加し、純メリノ  
一種は全羊頭數中僅か三・七%に過ぎぬと云ふ状態である。但し一部の羊毛には濠洲  
にも産せぬ優良なものがある。

新西蘭の主要輸出品は第一が酪農製品、つぎが肉類で羊毛は第三位にあるのを以て  
しても、新西蘭の牧農が濠洲の如く羊毛生産に偏せず、バター、チーズの生産並に肉  
類の罐詰製品に主力を注いでゐることが判る。之等食糧品は殆ど英本國に送られる、



一九三九年度の食糧對英輸出は七千萬磅に達した。

濠洲の金鑛開發熱の餘波が二百哩の海を隔たる新西蘭にも及んで、一八五〇年南島の北方ネルソン金鑛が、ついで一八六一年には全じく南島の南方オタゴ州ツアペカに金鑛が発見されたが、金産額は濠洲に劣る。新西蘭の煙草は有名であり、一九三八年度産額六千キントナル。英本國の新西蘭投資は公債として一億三千百萬磅、雜投資として千四百萬磅、合計一億四千五百萬磅、である。邦人の投資、事業はない。

## 六、悲惨な印度農業

印度は面積四百六十八萬平方キロ、人口は一九三一年度調査で三億五千二百八十三萬餘である。印度は十年目毎に人口調査を行ふことになつてゐて、昨一九四一年度に調査が施行されたのであるが未だその結果は發表されてゐない。然し優に四億を突破

してゐることは確實である。

印度經濟の中心は農業で農民は全人口の七〇%以上を占める、即ち統計の示す所によると

	農業人口	工業人口
一九一一年	七一・三%	一一・〇%
一九二一年	七三・九%	一〇・四%
一九三一年	七一・〇%	一〇・五%

となり、更に農業關係依存者を加算すれば全人口の九〇%に達する。多數の印度農民は文字通り赤貧洗ふが如き悲惨な境遇に置かれ、窮乏と負債とに苦しみ喘えゐてゐる。それは怠惰と安逸、貯蓄心の缺乏、浪費癖から來る民族的缺陷、並に氣候風土による農業上の疲弊も一面の理由ではあるが、英本國の對印政策がその主因である。即ち東印度會社時代から總督統治期の近年まで、英國産業資本發展の過程に於て、本國工業



製品の原料市場並に販賣市場の對象としてのみ施策せられた犠牲であつたのである。綿製品を主とする印度製品の本國輸入禁止、逆にランカシア製品の印度市場への氾濫が、印度の生命であつた農村手工業を急速に崩壊せしめ、印度農村經濟の根幹をなしてゐた中世的ギルド組織を没落せしめた。亦英國の印度統治が、農業發展に比較的冷淡であり、印度自体の利害よりも、英本國の政治的、軍事的施設に主力を注いだ結果、農村に對する施設が閑却されたことも掩ふ可からざる事實で、印度民衆から募集した百二十億ルピーの國債中、熱帯農業の生命とも云ふべき灌溉施設に對し、僅に三億八千萬ルピーを投じたに過ぎなかつたことが、這般の消息を物語る。十八世紀時代最大の綿製品輸出國であつた印度が、ランカシア工業の原料地として、強制的に棉花小作人に轉換せしめられた東印度會社時代に、印度の手工業紡績は全滅した。一八五八年印度統治法制定以來、印度土着資本による紡績業の復活を見たが、紡績業自体の發達は

之れが爲め中斷され、窮乏農民國印度へと轉落を餘儀なくされたのである。

印度の農業は棉花小麥を主とするが、それ等栽培面積は棉花が三百五十萬エーカー小麥が五百三十八萬エーカーで、産額は棉花千六百萬擔、内國內消費九百萬擔、輸出能力七百萬擔。又小麥は千百萬噸と云はれ、落花生、胡麻、ゴム等も相當生産する。黄麻は棉花と並んで印度最大の農産資源で一九三八年度作付反別百二十四萬ヘクタールに上り、産額は一九三九年度千七百四十八萬キントナル（一キントナル約十五貫）で世界第一である。黄麻及同製品輸出価格は四百五十三萬ルピーに達し、印度輸出總額の一二・一%で、棉花の一〇・五%を凌ぐ。輸出先は英を第一位とし米國之れに次ぐ。米は一九三九年度作付反別二千九百萬ヘクタール、産額三億八千五百萬キントナルとあるが、然し四億民衆の需要に應じ得ず、多量の米をビルマから輸入しなければならぬ。緬羊は二千四百萬頭、羊毛産額二萬二千六百噸、その大部分は手工業及絨緞工業に消費さ



れる。絨緞は印度が輸出し得る唯一の羊毛工業製品で、輸出額一九三八年度四千噸。印度茶は世界第一の輸出量を有し、一九三九年度輸出額二億八千二百萬磅に達した。

### 七、躍進的な印度工業

印度の工業は綿工業を中心とする。棉花栽培國から再出發後、一八五一年孟買に資本金五〇萬ルピーで紡績數二萬九千、職工數五百と云ふ紡績工場が創立されたのが始めで漸次發展、一時第一次大戰の世界的不況と英本國の對印政策強化によつて阻止される情勢にあつたが、戰時中英國の生地綿布を驅逐して印度市場に伸展した日本綿業に痛く刺激され、國民運動の擡頭と相俟つて、印度土着資本による綿工業の躍進振りに、英國も遂に讓歩を餘儀なくし、一九二七年の綿布保護關稅、一九三〇年の印度綿業保護法案となり、爾來急速の發達を見、一九三七年度その生産高は四十億碼を突破

するに至り、紡績工場數も八千九百三十を算し、使用勞働者百六十七萬六千人に達した。度印綿業への投資中、八〇%は純然たる土着資本である。

綿工業に次ぐ鐵鋼業は一九〇七年民族資本によるタータ鐵鋼會社が創設されたのを契機とし、多數の製鐵會社工場が設立、現在その數四十六に及び、一九一二年當時鐵三十五萬噸、鋼鐵四萬九千噸に過ぎなかつたものが、一九三八—三九年度には、鐵百五十七萬五千噸、鋼鐵九十三萬五千噸と飛躍した。化學工業は印度アルカリ化學工業會社をはじめ三十餘社に上り、アルミニウム、アンチモニー、硫酸、塩酸其他十二種目は自給自足の域に達した。電力は水力二千七百馬力、今次大戰と共に軍備工業は各部門に亘つて顯著な發達を見てゐる。現在印度諸工業の資本總額は約十八億ルピーで、英資本と土着資本と相半するが、量的に英資本と拮抗する土着資本も、實際は製造原料、機械設備等に高率關稅が賦課されることや、金融機關が完全に英本國の



支配下にあるために、實質的には英資本に隸屬するの已むなき状態にある。

印度の鑛業資源は頗る豊富、鐵鑛の埋藏量は三十六億噸と推定され、石炭の埋藏量は六十億噸に上る。マンガンはソ聯について世界第二位、年産百萬噸で世界産額の六分の一。石油はビルマに依存し、クローム鑛も爾く豊富ではない。銅はシンパム銅山の生産額四千五百噸、堆藏量三十餘萬噸である。

印度は農業國であり地下資源も豊富であるが、經濟的にはビルマ依存が頗る濃厚で、米を主食とする四億の民衆に對し印度産米のみでは賄ひ切れず、年々その補給を受け一九三八年度実績によるもその量百二十六萬噸に達し、ビルマ米輸出額二百八十萬噸に對しその四割五分に當る。石油は輸入機械油四千萬ガロン中三六%、輸入揮發油一億二百萬ガロン中六三%、輸入石油二億三百萬ガロン中六六%がビルマからの輸入である。亦チーク材の輸入量十七萬立方呎の九五%は、ビルマから供給を受けてゐる、

さればビルマが制壓されるれば印度の産業經濟はその國民生活とともに、非常な窮地に陥らざるを得ないのである。

## 八、周邊の産業與其他

皇軍制壓下にあるアンダマン諸島は、面積八千平方キロ、人口は一九四〇年度三萬餘、椰子、ゴム、マニラ麻、シザル麻等が栽培され、開墾面積六〇〇エーカー、米、玉蜀黍等の農産物にも富む。輸出品は木材、茶珈琲、ココア、ゴム等である。

セイロン島は面積六萬五千平方キロ、人口六百二十萬餘、シンハリース民族を主とする十餘の種族から成る。開墾地は全面積の四分の一に當る三百五十萬エーカーで、其他は森林である。主要産物は茶、ゴム、椰子、米等そのうち茶は耕作面積四十萬エーカー生産額十萬、噸投資は英を主とする歐米系、ゴムの栽培も近年著しく發展、馬



來、蘭印につぐ世界第三位で一九三八年度六萬噸、世界産額の六分五厘に當る。鑛産物としては黒鉛が有名で一九三九年度黒鉛鑛六百九十二、輸出量二萬三千四百噸。其他各種寶石を産する。全島の貿易は輸出三億三千八百萬セイロンルピー(邦貨約三億七千六百萬圓)輸入二億四千百萬セイロンルピー(約二億七千七百萬圓)輸出の七〇%は英本國輸出、輸出品の主なるものは紅茶、ゴム、椰子油、椰子實等である。

日本と印度との經濟關係は一八七六年(明治十年)に始まり、一九〇四年最初の通商協定が締結された。國際情勢の變化から一九三三年四月印度をして此の協定を破棄せしめるに至り、爾後三年毎に會談を行ふ原則を決定、第一次會商で新協定に到達、毎年印棉百五十萬俵と吾が綿布四億碼をリンクさせたのであつたが、一九三六年第二次會商で英國側により協定廢棄され、一九三七年ビルマを切り離すことによつて綿布割當量問題を解決したが、支那事變となり續いて吾が佛印進駐となつたので、此の協定

も一方的に破棄されたのである。吾が對印貿易額を示せば左の如くである。(單位萬圓)

	輸出額	輸入額	合計
大正七年	二〇、二五〇	二六、八一八	四七、〇六八
昭和四年	一九、八五〇	二八、八一〇	四八、六六〇
全十二年	二九、九三七	四四、九四九	七四、八八六
全十三年	一八、八〇四	一七、二二三	三六、〇二七
全十四年	二一、〇九九	一八、二二六	三九、三二五

尙英國の印度及セイロン島への投資は、一九三六年度調査で、公債二億五千六百萬磅、鐵道八千四百萬磅、公共事業七百萬磅、鑛業千二百萬磅、其他七千九百萬磅で、合計四億三千八百萬磅(邦貨約七十五億圓)自治領及植民地投資に於て濠洲につぐ第二位、英海外投資額に對する比率は一一・八%となり、この投資による英國の所得は年一億五千萬磅(邦貨二十五億八千萬圓)に達する。



昭和十七年十一月卅日印刷  
昭和十七年十二月五日發行

(非賣品)

發行者

中山英一郎  
東京市京橋區銀座西一ノ一金剛閣

印刷人

小宮山幸造  
東京市牛込區早稻田鶴卷町三七一

印刷所

集美堂印刷所  
東京市牛込區早稻田鶴卷町三七一

不許  
複製



429  
77



終

